View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

関西学院大学リポジトリ
Kwansei Gakuin University Repository

神戸旧居留地におけるエリアイメージの再構築 ： スケール感に着目した街の魅力の向上

著者	稲谷 真里
雑誌名	KGPS review : Kwansei Gakuin policy studies review
号	28
ページ	13-20
発行年	2021-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029513

神戸旧居留地におけるエリアイメージの再構築

－スケール感に着目した街の魅力の向上－

稲谷　真里*

【要旨】

現在の旧居留地では、街並みの「風格」に貢献する歴史的建築物（様式的建築）のスケール感を逸脱する現代建築物の増加により、街並みの奥行き／立体感の不足および街区イメージの崩壊が進行していると捉える。そこで、新旧の建物が保有するスケールに着目して分析を行い、旧居留地の街並みを構成するスケール感やイメージ形成要素を抽出する。その上で、他の課題解決とともに、歩行者スピードに合わせたヒューマンスケールの街の回復による、エリアの魅力向上を目指す。最終提案において、スケール感の統一とレイヤーの重層化に基づいた街区イメージ踏襲および奥行き感創造の新たな手法を模索し、街路風景を形成する道と表層（道際諸要素の複合全体）のみならず、街に滞在する人々の営みも含めた“深み”づくりを試みる。

キーワード：神戸旧居留地、建築、街並み、ファサード、スケール、レイヤー、イメージ

1. はじめに

研究の大テーマとして、「人と時代に寄り添う建築と街～社会と建築設計の共生による、持続可能な魅力の維持向上～」を掲げている。既存の街において、魅力を備えた持続可能性を実現するためには、その街の特徴やアイデンティティ、課題を見直し、ニーズや時代に応じながら変化する必要があり、その手法を模索したい。

街のイメージは、風土（地形・気候・地理的位置）や歴史（街の成り立ち・歴史的建造物・街の変遷／発展・人の営みの蓄積）、文化（習慣・生活様式・伝統・価値観・思想）を背景として、モノとしての建築物と、人々の活動を含めたコト（事象）が、街並みに個性（＝“らしさ”）を与えることで形作られていると考える。そこで、街並みにおいて、エリアとして特有の雰囲気を有する神戸旧居留地を対象に、その要素となる建築言語に着目しながら、街の今後の在り方を考える。

現在の旧居留地では、街並みの「風格」に貢献する歴史的建築物（様式的建築）のスケール感を逸脱する現代建築物の増加により、街並みの奥行き／立体感の不足および街区イメージの崩壊が進行していると捉える。そこで、本論では新旧の建物が保有するスケール

* 関西学院大学大学院総合政策研究科博士課程前期課程（fne01168@kwansei.ac.jp）

に着目して分析を行い、その他の要因と併せて提案へとつなげ、スケール感の統一とレイヤーの重層化に基づいた街区イメージ踏襲および奥行き感創造の新たな手法を模索する。

槇文彦氏は、著書『見えがくれする都市』の中で、街路風景が、その地区や場所の性格、評価に直接関わるだけでなく、誰もが共通して経験でき、一部は典型化され、地域のシンボルとして都市全体のイメージとなる、と述べている。上記の仮説を基に、街路風景を形成する道と表層（建物ファサードや、道際の諸要素の複合全体）のみならず、街に滞在する人々の営みも含めて、旧居留地の“深み”創造につながる手法を考察する。

2. 現状把握

旧居留地の性格や特徴を読み取るため、以下の 5 点を調査・考察した。

① 統計情報
② 地区計画・規制・ガイドライン
③ 旧居留地エリアの街区イメージの形成要素
④ 旧居留地内の筋／通りの性格
⑤ テナントの質と大丸の存在

統計情報から、旧居留地の大部分が業務中心地域であり、日中は商業やオフィスにより人々の活動が集中する反面、居住地の少なさゆえ、夜のにぎわいを保ちにくいと推察した。また、周辺（北東／北西）の鉄道駅利用者数は増加傾向だが、旧居留地内には駅が無く、人の流れをいかに内部まで浸透させるかが課題であるとみた。

現地調査より、新旧の建物が共存する旧居留地における街区イメージの形成要素を、3 点抽出した（①周辺地域と異なる街区方向 ②建築物のテクスチュア ③ファサードのスケール感とデザインボキャブラリー）。

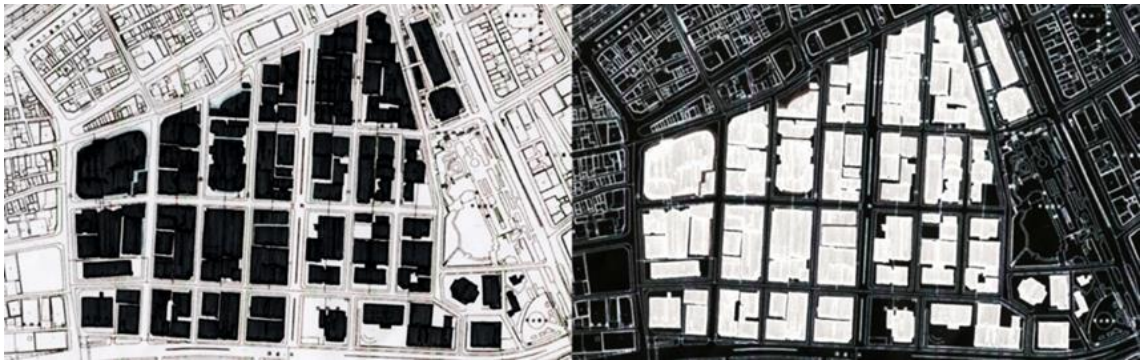
各計画では、歴史的な要素にふさわしい重厚で連続／統一性ある歩行者中心とした街並みが目指されている。また、テナントの質はエリアのイメージ形成に強く作用し、訪問客の属性および滞在形態を左右する。震災以降のテナントの変遷から、ブランドが高級化し、テナント誘致戦略に取り組む大丸の影響力も強いことがわかった。

3. 問題抽出

3.1 図（建物）と地（道路、空地）の比較

街の魅力を計る指標として、芦原（2001）はゲシュタルト心理学における「図と地」の概念を用い、まちの構造を分析していた。以上に習い、旧居留地の建物と道路／空地空間を視覚的に比較した（下図）。建物ボリュームに対して道空間が少なく、芦原の言う、元図と反転図とのイメージの近似性が示すところの、内外空間の親和性に欠け、内外が極めて明確に分離されているゆえ、旧居留地での滞在が建物内にとどまり、街路が単なる通過動線となっていることがわかる。建物間の隙間空間は単なる余白ではなく、内部空間と

繋がってアクティビティ等を許容する、都市にとって意味ある空間だが、旧居留地では封鎖され、立ち入れない場合が多い。また、街区内の空地は屋外駐車場や人の侵入を防いだ空間（花壇やコーン）となっており、街の魅力や滞在要素に貢献しているとはいえない。



3.2 旧居留地の街並みがもつスケール感の分析

街並みにおける違和感の要因がファサードのスケールにあり、細かなデザインが街の温かみや親和性、にぎわいにつながると仮定し、街並みを構成するスケールを分析した。歴史的建築物のもつスケールは、概ね柱ピッチ 3～4m前後であり、その表情も 200～600mm 前後程度の仕上様で構成されている一方、新しい建物では、構造形式の変化や、様々な現代的デザイン手法の採用により、ほとんど全てで大きな寸法が用いられており、前者のスケールを逸脱する建物が街並みにおける齟齬の原因であると考察した。

3.3 街並みの背景にある問題点

地区／景観計画や各種ガイドラインの効果を検証するとともに、街に大きく関わる旧居留地連絡協議会を取り上げ、それらの在り方について、先行事例に基づき言及した。さらに、歩行者通行量および歩行者空間の連続性を調査するとともに、エリア内の車輌規制について考えるため、駐車場の利用状況を分析した。現在の建物低層部用途および活用不足、オフィスの空室率上昇から、街の機能転換や活力（にぎわい）低下を危惧し、歩行者空間の充実による街の魅力向上の必要性を説いた。

4. 主な課題

・計画やガイドラインには、齟齬や抽象的な表現が見られ、判断が建築主に委ねられている。ガイドラインでは、旧居留地にふさわしい事例として良いとはいえないデザインも挙げられており、誤解を招く恐れがある。このように、方針軸の揺らぎや強制力の低さが、許容範囲の広さにつながっている。
・街区イメージとなっている組積造表現を基本とする様式的デザインがもつ細やかなスケール感は、表層の仕上げ材および構造体のスケール（特に柱スパン）によって与えられている。しかし、構造形式の変化に伴う柱スパンの拡幅や、大判化した現在の表層仕上げ材ゆえのスケール拡大によって、新旧の建物のもつスケール感に違いが生じているといえる。
・計画や構想で目指されている歩行者空間の充実の一環として設置義務化されている街角広場は、スペースが空いているのみにとどまり、活用方法が与えられていない。
・各テナントがファサードやショーウィンドウ等で独自の世界観を演出することから、テナント誘致がまちのイメージを左右し、ふさわしい演出を誘導する仕組みが必要である。
・商業と業務を主軸とし、テナントの質もハイブランド化の傾向が見られることから、利用者の属性や利用時間が限られる。その点は、先行研究においても示されている。
・ストリートごとに違った性格を保有している反面、それに伴う利用者の偏りを解消すべく、各ストリートをソフト・ハード面でつなぎ、エリア全体の回遊性を向上することが求められる。
・エリアの歩行者数や回遊性を減少させる要因に、路上駐車／駐輪や建物低層部の活用方法が挙げられ、オフィスの空室率が拍車をかける。
・旧居留地内に多数存在する中小規模の駐車場は利用に偏りがあり、必要性が低い。街区イメージの上でも、異質な建築デザインあるいは空地として、街並みの連続感を失わせるなど問題がある。利用状況分析から少数で補うことができ、歩行者空間充実のためにも集約する必要がある。三宮／三宮中央通り駐車場の利用状況から、需要に対して余裕があると判断できることから、中小駐車場を廃して歩行者空間の充実や街並みの魅力向上に役立てられそうである。

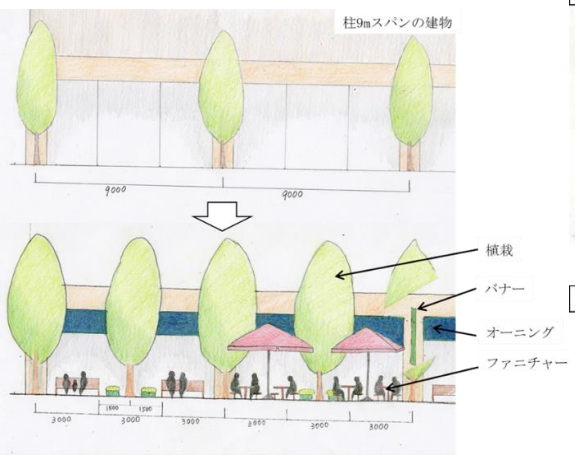
5. 課題解決　－歴史的建物に合わせた深みの創造－

はじめに、旧居留地内の既存の取り組み（神戸市協定道路・ポルティコ／アーケード／抜け道空間・オープンスペース・歩行者天国等）を取り上げ、その効果と課題を検証し、旧居留地連絡協議会や地区計画・規制・ガイドラインの在り方について言及した。次に、国内外における取り組みの中で、旧居留地において参考できる事例（葺合南 54 号線・三宮センター街・東京丸の内仲通り・イギリスバーミンガム市における都市再生）を抽出し、応用方法を考察した。

最後に、本論文の内容を踏まえた上で補足を行いながら、スケール感に基づく「歩行者空間の充実と深みの創造」のためのイメージ提案を行った。改革の必要性や旧居留地の歩行者空間化、レイヤー複層化による断面方向の深み創造、日常のエンターテイメント性について事例を取り入れ考察した後、以下に着目して提案した。

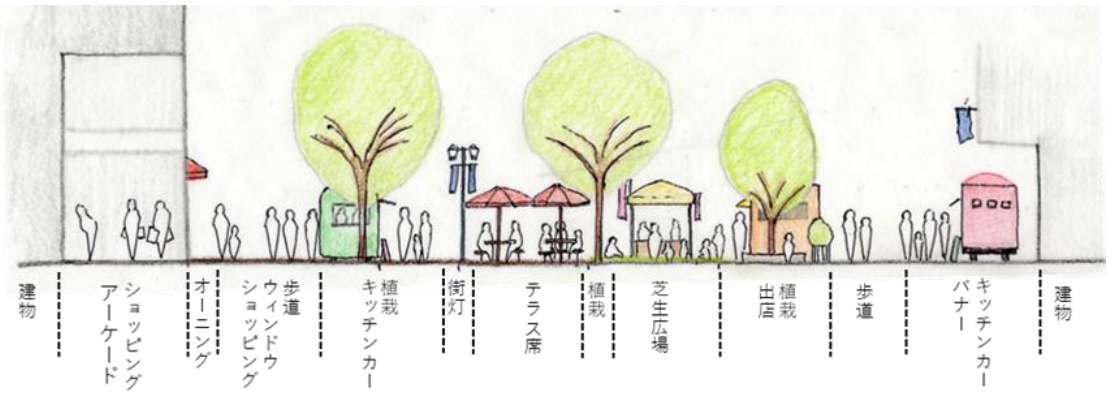
・歩行者空間の拡充　・空間のスケールダウン　・車輌排除
・歩行スピードの回復　・奥行き感（レイヤー）の獲得　・滞在目的の提供

＜スケールダウンの手法＞



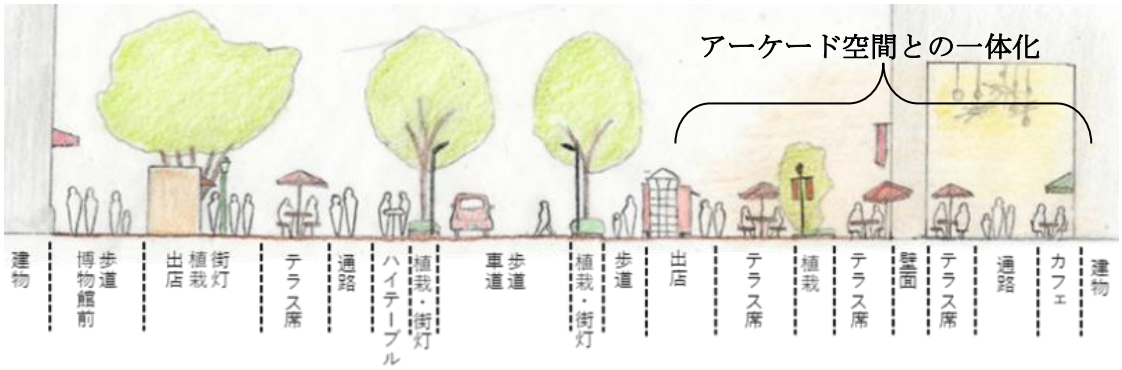
＜歩行者空間拡充と車輌速度制御のイメージ＞

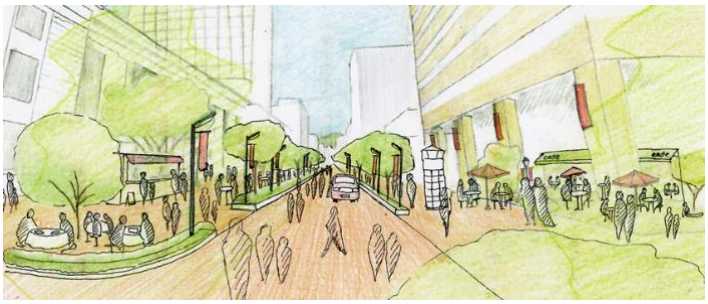
＜スケールダウン、歩行速度への適応、レイヤーの複層化：三井住友銀行前＞



車線縮小により歩行者空間に歩行者速度に合わせたスケール感を確保でき、緑の密度の向上はふさわしくないファサードデザインの中和にも役立つ。Wi-Fi／電源完備の屋根付きパークレットを配置し、平日においても、仕事や飲食店のテラス席として活用できる。例えば、旧居留地固有のスケールを逸脱した三井住友銀行前には、キッチンカー等のアメニティに富んだオープンスペースを配置し、レイヤーの複層化によるスケールダウン（建物ボリューム／スケール感による圧迫感を軽減）と、広場空間の充実を図っている。また、一部を芝生とし、旧居留地内の広場空間として、休日の銀行閉店時も利用価値を提供する。

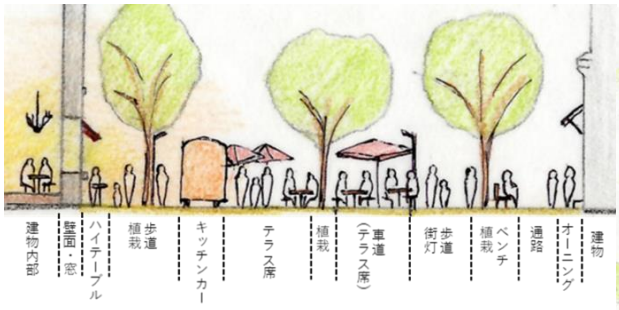
＜車道の縮小と歩行者空間の拡充：京町筋＞





・神戸市立博物館の利用客の滞在と、ビジネス利用者を考慮したオープンスペース
・日中時間帯の車輌締め出し
・歩道を滞在の場に転換
・レイヤーの複層化
・車／歩道の一体化

＜車道減幅／蛇行、滞在空間拡充＞



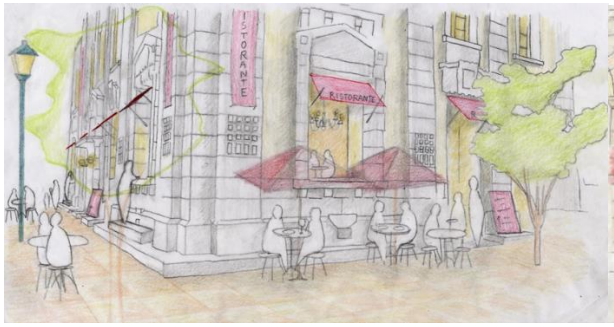
車線を一車線にし、緩やかに蛇行させることで、建物前の空間に「たまり」をもたせている。また、歴史的建築物であるシップ神戸海岸ビルと商船三井ビルディングは、内部の様子がわかりにくく、閉じた空間（ボリュームとしての存在）であったため、バナーやオーニングを活用し、外部空間に人の滞在やにぎわいの生まれる用途をテナントに入れることで、歩行者の認知を促進しているとともに、夜の滞在およびウォーターフロント（メリケ

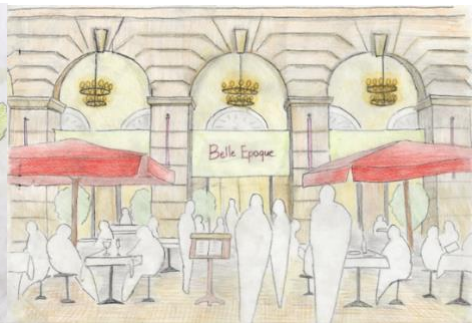
ンパーク）との回遊性を高める用途（マルシェやバルなど）・形態（歩道上に広がるテラス席等）を導入している。

＜街の奥行き感・連続感創造＞

・街路樹を増やし、ライトアップによる幻想的かつ温かみのある空間創造
・オーニングが続く事で、柔らかな印象と街並みの連続性演出

＜建物内外のつながり創造案＞





・バナーやオーニングを活用
・にぎわいや温かみを窓を通して外部へ延長

・ポルティコと歩道の一体的活用による建物～歩道の滞在空間層創造

6. 結論

旧居留地の重厚で風格ある街並みは、バナキュラーな歴史的建築物によってもたらされているといえる。それらには、組積造風にするための材質や構法が用いられており、石やレンガなどの材質や大きさは、凹凸や陰影、細やかなデザインを生み、ポルティコやアーケードも含め、街並みに奥行き感と立体感、情緒性をもたらしている。ファサードの細やかさは、歩く（デザインを目で追う）スピードにふさわしく、ヒューマンスケールの街並みを演出している。こられの様式的建築に対して、現代の建物は、経済的合理性や効率性を優先した構造や材質が用いられており、テクノロジーの進歩も相まって、無機的で平板な表情をもつものが多い。本論では、後者の存在によって、地区計画・ガイドラインによる景観誘導が行われているにもかかわらず、旧居留地の奥行き感やヒューマンスケールの魅力が失われつつあり、街並みの破綻につながっていることを問題視し、建物ファサードのスケール感に着目して分析を行うとともに、歩行者スピードにふさわしい街並みとヒューマンなアクティビティの回復を目指した。加えて、現在の街並みにおける課題点を多方面から抽出し、併せて考察した。

提案では、様式的建築のスケール感を生かして、まちの奥行き感の拡幅や、歩行者空間の充実、巨大なファサードの分節手法などを図った。その際に、空間のレイヤーの複層化も、街区の重厚感や豊かさのイメージに大きく貢献するとの視点から提案を行った。

7. おわりに

旧居留地において、誕生当初からの街区や建築物意匠が守られ、阪神淡路大震災で甚大な被害を受けたにもかかわらず、街並みや風格が現代に引き継がれていることは、賞賛すべきことである。街の変容地点である時代の変化、特に震災復興において、旧居留地の伝統と歴史を引き継ぎながら、街並みや魅力が再構築されてきたことは、旧居留地に関わる方々の努力があったからこそ成し遂げられたものであり、旧居留地が愛着や誇り、責任感を感じさせるまちであったことも事実である。そのまちを今後も守っていくためには、「まちの把握・分析・考察」と「手法提案」が必要不可欠であり、今回本研究にてそれらを試みた。

既存の地区計画やガイドラインでうたわれている「風格」が、何によってもたらされているのかを、スケールやファサードデザインに着目して追究し、様式的建築がもつスケール感や材質、デザインの細やかによる陰影や立体感によるものであると説いた。また、現在の旧居留地の街並みに見られる問題点とした、奥行き感の不足や無機質なデザイン、ヒューマンスケールを欠くボリューム／面の存在などを、スケール感に着目して、街並みに現れた齟齬の原因を考察し、既存の取り組みにおける評価および事例を踏まえ、解決策を模索した。

研究を経て、まちづくりの手法や事例が多様にあることを再認識するとともに、存続に危機感を覚えているまちが多く存在することを痛感した。本研究では街並みの美学的なアプローチから、スケール感に基づいた分析手法を提示したが、今後も考察を続け、一つでもまちの存続に貢献できるように邁進したい。

【参考文献】

＜日本語＞（あいうえお順）

芦原義信（2001）『街並みの美学』岩波書店.

槇文彦（1980）『見えがくれする都市』鹿島出版会.